


# 災害支援ナース活動報告書

報告者：小林 賢市

所属施設：新潟県立新発田病院

報告月日：令和6年1月19日

活動日	令和6年1月12日（金）～1月15日（月）
活動場所	施設名：珠洲市正院小学校
活動内容	<p>金沢市内での前泊を終え、派遣先の珠洲市へ。道路の亀裂・陥没・崩落のため交通規制がかかる中、到着までに約7時間を要した。</p>  <p>我々災害支援ナースは、対策本部の組織として、「医療介護班」に属し、避難者の体調管理、感染症予防、環境衛生に注視することが大きな役割となる。避難者は約220名、高齢者が多く、小学校の各教室が避難場所となっていた。避難環境は決して良いものではなかったが、ある程度のコミュニティは確保されている印象を受けた。活動内容は、以下の通りである。</p> <p>〈体調管理〉発災から10日以上が経過し、心身の健康が阻害されていることが予測され、早急な健康観察と本部との情報共有が必要と考えた。一日数回の巡視で健康観察を実施し、有熱者の把握やその他症状に対する対処療法的な関わりを一覧にし、体調変化を追跡できるよう健康観察を継続し、また必要に応じ診療へ繋げることとした。市販の内服薬・外用薬は豊富に常備されていたため、症状に合わせて渡し、外傷などへの処置にも利用した。不足が生じる恐れがあるものに関しては、日赤薬剤師チームに情報提供し補充を依頼した。時期にもよるが感冒症状を訴える方が多かった。</p> <p>〈感染症予防〉到着早々にCOVID陽性者（2名増え、計5名）の隔離について検討し、部屋移動を実施。医療施設とは異なるため完全な隔離は困難であったが、その中でも拡大を防止できるよう一室を感染者の避難部屋として設けた。その後も発熱者は多かったが、検査していないため感染拡大防止に繋がれたかは不明。幸いにも電気は通り暖房も使え、室内では寒さを感じることはなかったが、換気という面では十分とは言えず、定期的に声掛けし避難者の理解を得ながら実施した。更に水は貴重な資源であったが、手洗い・うがいの啓蒙に努めた。</p> <p>〈環境衛生〉トイレ環境の整備（清掃、ゴミ回収、物品補充）、うがい場（清掃、ゴミ回収）、室内外の清掃、共有スペースの清掃・清拭などを実施。</p> <p>〈生活介護等〉1月14日二次避難が始まり、55名が退去。それに伴い要支援・要配慮者が避難所に残り、その方々の住環境の整備や生活介護等を支援ナースが担うこととなり、防災士の協力を得ながら実施。</p> <p>〈その他〉1月15日、小学校の再開に伴い、避難場所として使用していた部屋を空ける必要があった。避難部屋の移動やテント型パーテーションの組立・設置など大きな労力ではあったが、これに関しても防災士の協力を得て実施。</p> <p>対策本部には避難者名簿があるものの、各避難部屋には誰と誰が在中し、計何人が居住しているのかは把握できていない。紙面に部屋の簡略的な見取り図を作成し、そこに現病歴・既往歴や継続して服用している薬、継続して観察が必要なことなど聞き取った内容を書き記した。随時更新が必要となるが、現時点での内容として後続隊への引継ぎにも活用できた。</p> <p>以上、簡単ですが活動の内容についてまとめました。</p>
所感	<p>非日常を目の当たりにする中で、自分自身何が出来たかは不明です。決して容易ではありませんでしたが、支援ナースとして少しでも活動できたことに感謝します。</p>

# 災害支援ナース活動報告書

報告者：古山 未来

所属施設：県立がんセンター新潟病院

報告月日：令和 6年 1月 31日

活動日	1月12日(金) ～ 1月15日(月)
活動場所	施設名 正院小学校
活動内容	<p>・避難者の健康チェック。午前と午後の2回実施。有症状者(発熱、咳、咽頭痛など)には市販薬の配布を行う。3日分ほどお渡しする。要観察者はメンバー内で情報共有し、連日注意して観察していく。PWJ 看護師へ情報提供し、診察が必要な避難者のピックアップを行う。</p> <p>・本部へも直接有症状者が訪室するため、その対応を実施。日中倒壊した家を見に行く方もおり、けがをして戻ってくる方もいるため創傷処置の方も数名いた。連日継続して処置を行った。</p> <p>・コロナウィルス陽性の方も数名おり、活動中にも陽性者が出たため、部屋の移動や、ゾーニングを実施。避者所へもマスクの着用や手指消毒の声かけを行った。</p> <p>・活動中に2次避難で計60名の方が退去したため、その後の部屋移動を行った。小学校の再開に併い、3Fを空ける必要もあったため、3Fの避難者を2F、1Fへ移動してもらうなど大幅な部屋の再編成が必要となった。避難者へ説明を行いながら部屋移動に協力していただき、3Fを空けることができた。</p> <p>・防災士やボランティアの方と協力しながらトイレ清掃やうがい箱の交換を行った。水は出ないためトイレは簡易トイレが各階にあり。凝固剤入りの袋の準備や補充を実施。外には仮設トイレがあり、流すための水の補充を行った。(ペットボトルに水が入り置いてある)</p> <p>うがい薬の作成・交換を実施。うがい箱の交換を定期的に行った。</p> <p>・正院小学校では自立している方が多い印象だったが、杖歩行の方なども数名みられた。食事の配膳に取りに来ることができない方には、声をかけて炊き出しをお渡しに行った。また、PWJの診療の際には部屋から診療室までの送迎を行った。</p> <p>・夜間はメンバーのうち1人が交替しながら連日当番となり、夜間に本部へ避難者が症状を訴えた際に電話で呼び出されることになっていた。活動中は1度呼び出しがあった。</p>
所感	<p>・被災後約2週間であり、疲労や環境の変化などから体調不良を訴える避難者が多い印象だった。特に風邪症状(咳、咽頭痛、発熱)を訴える方が多く、総合かぜ薬などが不足しやすくなっていた。また、持病等の悪化も懸念される時期であり、被災し普段内服している薬を持たずに家を出てきたという方も多くいることが聞きとりで判明した。薬を持ってきていないことに気づいていなかった方や、持ってきていないことに気づいていてもそのままにしていたというケースもあった。そのような事に早期に気づくことができ、災害関連死へ繋がらないようにするためにも日々の健康状態の観察や避難者への声かけを積極的に行うことが大切だと感じた。また、避難者も忙しくしているスタッフを見て、声をかけにくく、体調が悪くても遠慮をせずにいる場合もあるかもしれないため、こちらからの声かけやコミュニケーションを取りやすい雰囲気づくりも大切になってくるのではないかと感じた。そして現場では多職種が互いに連絡、相談し合いながら、いかに避難者が安全に安心して生活することができるのか、1人1人が責任感を持って活動をしていると感じられた。今回が初めての災害支援であり、もっとこうしたらよかったと反省する点が多くあるが、被災地での看護師の役割を身を持って学ぶことができたのは貴重な体験となった。</p>

# 災害支援ナース活動報告書

報告者：相場由美子

所属施設：燕労災病院

報告月日：令和 6年 1月 31日

活動日	1月 15日(月) ～ 1月 18日(木)
活動場所	施設名 珠洲市正院小学校
活動内容	<p>発災より2週間経過した時点で正院小学校の避難所へと派遣が決定した。</p> <p>活動1日目は、金沢より約5時間かけて珠洲市の避難所に移動する。到着後に先発隊から申し送りを受ける。巡回診療日であり、状態変化がある避難者4名の診療補助をおこなった。そのうち1名が発熱、足背部の腫脹、熱感、疼痛があり診察。蜂窩織炎の診断で継続した治療が必要となり総合病院へ救急搬送となる。その避難者や家族の精神的ケアをおこなった。</p> <p>活動2日目の早朝より下痢症状を訴える避難者が数名いた。状態把握のため、避難者全員の健康チェックを実施する。下痢症状を訴える方は7名となり、感染性胃腸炎やノロウイルスの可能性を考慮して、手指消毒の指導や消毒剤の設置場所の確認をして、段ボールによるパーティション設置をおこなった。また、次亜塩素酸でのトイレ清掃、ドアノブや手すりの消毒を実施した。</p> <p>活動3日目は、下痢症状のある方は症状の改善が徐々にみられていた。また他の方への症状拡大はないと健康チェックで確認した。ミーティングをおこない、次亜塩素酸での消毒、清掃はナースが継続しておこなうこととなり実施を継続する。居住環境に対しては、防災士と協力しながら窓に断熱シートを貼った。またパーティションテントや段ボールベッドの支援物資が届いていたため、設置をした。また、テーブルがなく食器を床に置いて食事していたため、物資置きに使用していたテーブルを活用して食事スペースの確保をおこなった。</p> <p>活動4日目は、前日同様に居住環境の整備としてパーティションテントや段ボールベッドの設置を防災士や避難者と共に協力しておこなった。また、後発隊への情報共有のため避難者の情報を書いた用紙を保健師と協力しながら作成した。後発隊の到着があり、活動終了とした。</p>
所感	<p>発災より2週間経過しており、感染症出現の可能性を考慮して避難所に向かった。避難所ではCOVID-19陽性の方や下痢症状の出現がみられた。拡大を防止するため、部屋やパーティションによるゾーニング、手指消毒の指導、次亜塩素酸を用いて消毒を実施する。日々の業務の中での知識を活用して衛生環境の整備をおこなうことができたと考える。また、居住環境については、プライバシーの保護や感染面、健康面などを考慮してパーティションテントや段ボールベッドを設置したり、食事スペースの確保としてテーブル設置をしたりした。生活環境を整えることは最も大切なことであり、精神的な安定にもつながることだと考えさせられた。日々の業務での知識や技術の経験が支援活動に繋げられることだと改めて感じる事ができた。</p>

# 災害支援ナース活動報告書

報告者：`小島 圭太

所属施設：新潟県立燕労災病院

報告月日：令和 6年 1月 31日

活動日	1月15日(月) ~ 1月18日(木)
活動場所	施設名：珠洲市立 正院小学校
活動内容	<p>能登半島地震被害状況の多くが詳細不明であり、派遣前隊の活動状況の情報もなく、災害支援マニュアルや研修資料を参考に入念な事前準備を行った。</p> <p>1月15日、東京都看護協会2名、新潟県看護協会2名の計4名1チームで正院小学校に派遣となった。ライフラインは上下水道使用不可の給水有り、裏山崩落や体育館の雨漏りがあった。避難校舎自体も支柱や壁に亀裂があり、一部床が隆起しているような状況の中で活動した。</p> <p>避難者住民数約130人前後であり、約半数が要配慮者だが殆ど自立した方々であった。ただCOVID-19陽性者数名と咳嗽や発熱などの有症状者が発生している状況であった。前隊による避難者マップなど避難住民情報を引き継ぎ、現地の状況・情報から災害支援ナースにおける継続看護として、災害関連死につながる異常の早期発見・対応と慢性疾患の増悪予防、そして災害直急性期における感染症予防・蔓延防止と衛生管理、生活環境の整備に重点を置くことを目標として活動を行なった。</p> <p>健康チェックや夜間交代で相談対応から問題の芽を早期に発見し、早期対応につなげる活動を行なった。様々な外部支援との分野横断的な情報共有・連携がなかったため、前隊作成マップを空飛ぶ捜索医療団 ARROWS 木下 Ns、熊本市保健師チームと正院小学校災害対策本部との協働で更新し、避難者名簿に併せた看護カルテの作成も行なった。防災士、福井県職員そして被災者である地域住民の方々との協働により、生活空間の確保・改善、そして感染予防対策の一環として避難所用ルームテント設置と段ボールベッドの設置、気泡緩衝材による断熱を行なった。感染症蔓延防止対策として手洗い場を支援物資でDIYしたが、設置するには課題もあり至らなかった。その為、アルコールによる手指衛生の徹底を引き続き指導し、次亜塩素酸によるトイレを中心に環境整備を行なった。また食事も床に置いて摂取していたためテーブルの設置も行なった。</p>
所感	<p>避難所における看護師の役割は、避難している人の健康管理と維持、そして基本的な生活が送れるように支援することです。災害支援チームの皆で目標を共有し、議論し、多職種そして住民の方々と共に協働し問題解決に向け活動でき、大きな糧となりました。只、住民の方々に寄り添い、生活者の視点で支援活動をアセスメントし、実践及び再評価し、次隊に継続看護としてつなぐことができたのか悩み、支援を終えた今でも力不足で後悔の念が止みません。</p> <p>能力の限界を知ったことで、限界点を上げていくためにも、平時より生活者の視点での看護実践を意識的に学び実践すると共に、連携職種との関係構築を図り、次に繋げていきたいと思っております。</p> <p>派遣にあたり、日本看護協会関係各所、県看護協会、そして所属施設看護部の多大なる協力があり、無事に活動を終えることができたことに深い感謝を申し上げます。</p>

# 災害支援ナース活動報告書

報告者：大淵美保

所属施設：新潟県立十日町病院

報告月日：令和6年1月24日

活動日	1月18日(木)～1月21日(日)
活動場所	施設名：珠洲市 正院小学校 避難所
活動内容	<p>避難所状況：避難者122名→106名(児童4名)、教室やプレイルーム等計8か所で各部屋10～15名で避難中。グラウンドで車中泊者あり。3階教室で学校再開。体育館で救援物資管理、雨漏りあり。海から200m、体育館裏の山は土砂崩れ。電気OK、給水タンク、仮設トイレ、炊き出しあり。コロナ陽性者隔離中だったが1/18で隔離解除。食中毒と思われる下痢の方数名あり。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. 情報共有 災害対策本部(避難所内)で毎日ミーティングの参加。PWJ(空飛ぶ捜索医療団)、JRAT(リハビリ)、薬剤師会、熊本保健師、防災士など多くの職種と情報交換した。</li><li>2. 避難者の健康管理と健康維持増進活動 前任者が作成したカルテからの情報収集と、必要時バイタルサインチェック、有症状者はPWJの医師診察へと繋げた。内服薬の処方切れや一包化再調整依頼などの対応。厚労省からの市販薬の管理(支援ナースの判断で与薬)。車中泊者含めて避難者の健康チェック。夜間オンコール体制で有症状者の対応。 PTと協働しシルバー体操実施。避難所で継続できるよう、民生委員長兼シルバーリハビリ体操3級指導士に可能な範囲で継続していただくよう依頼。</li><li>3. 避難者の心のケア 話を傾聴。PWJより1. 5次避難や2次避難を避難者へ説明するよう依頼を受け説明するが、地元から離れたくないという方が多くあまり勧めることが出来なかった。</li><li>4. 避難所内外の環境整備 校舎内の散乱ガラスの片づけや破損が予測されるガラス戸の補強作業。ダンボールベッド作成。</li><li>5. 感染防止対策(コロナ、インフルエンザ、感染性胃腸炎、食中毒など) 次亜塩素酸ナトリウム溶液によるトイレ掃除。歯磨きうがい箱の交換。各部屋の換気。 食中毒に気を付けるよう食糧管理の声かけ。(古いものは食べない。炊き出しの食事はその日のうちに摂取)</li><li>6. 救援物資(PPE、市販薬等)の数量把握と管理</li></ol>

## 所 感

発災 18 日が経過しての派遣であった。当避難所は発災当初は 300 名程度の避難者がいたが、派遣当日は 122 名、派遣終了時は 106 名と、毎日数名ずつ二次避難していた模様。混乱期を經過し、避難所には ADL 自立の避難者がほとんどであった。ごみ収集、トイレ掃除など当番制で行っていたが、トイレの使用方法が守れない方もいて、掃除担当の方はストレスが蓄積され口論になっている場面もあった。うまく運営できるよう支援することも支援ナースの役割なのかと感じた。避難者の負担感を考慮しつつ、避難所生活が自立できるよう支援していく必要がある。災害関連死防止や感染症蔓延防止の活動も必須であり、感染症有症状者の把握と検査、必要時隔離、持病の悪化防止のための健康増進活動も開始できた。避難所自体が海から 200m、津波時の避難する裏山は土砂崩れしており、二次災害が起こる前に避難所の在り方を再検討していただきたいと思った。

新潟県看護協会 e-mail : saigai-shien@niigata-kango.com

# 災害支援ナース活動報告書

報告者：志田朝幸

所属施設：新潟白根総合病院

報告月日：令和6年1月25日

活動日	1月18日(木)～1月21日(日)
活動場所	施設名 珠洲市正院小学校
活動内容	<p>搬入物品の確認、搬入 避難者との会話による情報交換 保健師、薬剤師との小学校内の情報共有、各部屋で二酸化炭素濃度測定(換気について) 本部のミーティングに参加し室温計、湿度計設置していただくよう要望 避難者の健康観察(バイタルサイン測定) 小学校内及び仮設トイレの清掃、消毒 嗽箱の交換、嗽箱環境整備 避難所内、外ラウンド(危険個所の確認、動線の確認) ダンボールベッド13台を防災士と設置 厚労省からの内服薬、外用薬(応急処置)の確認、配置 避難所内散乱ガラスなど撤去作業 避難所で清掃班へ次亜塩素酸ナトリウムについて環境整備時、吐物、便処理による濃度について説明し周知徹底を促す DPOTによる避難者の診察介助 空飛ぶ捜索医療団(peace wind japan)より情報の共有、情報の報告、避難者の情報提供</p>
所感	<p>今日、急性期から慢性期へ移行している可能性もあり医療の需要が徐々に減っており、PWJなども少しずつ今後は巡回が減っていく感じが考えられる。 また、小学校が始まり避難所内のスペースを確保しづらくなっている現状がある。 今回の避難所では高血圧症の方がいるが食事面で塩分の高い食事形態(カップ麺、お菓子類)が提供されていたが今後は塩分の低い食事形態が必要とされ検討していく必要があると実感した。また、寒い日が続くが食事もその日の内に摂取し、次の日に持ちこさないよう配慮が必要である(食中毒の予防のため) 災害支援ナースとして活動し他職種との連携、避難者への周知徹底することで防げることはたくさんあると思うが優先順位を考え次につなげる支援を心がけ実践した。</p>

新潟県看護協会 e-mail: saigai-shien@niigata-kango.com

# 災害支援ナース活動報告書

報告者：伊藤 具子

所属施設：三条総合病院

報告月日：令和6年2月5日

活動日	1月21日(日) ～ 1月24日(木)
活動場所	施設名 珠洲市正院小学校 避難所
活動内容	
<p>金沢市内の前泊施設を出発し、マイクロバスで珠洲市へ向かった。対策本部を経由して進んでいくうちに、ひび割れや陥没で道は傾きバスは大きく揺れ、家屋は倒壊し景色は変わっていった。金沢市を出発し5時間後に正院小学校へ到着、4名の支援ナースで24時間体制3泊の活動を開始した。</p> <p>(CSCA) 先発ナースからの最小限の申し送りを受け、チャットワークや避難者1人ずつA4用紙に既往歴や避難経緯がまとめられた手書きのシート、要配慮者のピックアップや掃除のルールなどが記載されたノートから情報を収集した。避難所を巡回すると、裏山は崩れており海からも近く、体育館には水や毛布など物資が積み重ねられ、授業の再開で3階は小学校として機能し、1.2階の教室は避難者100名が生活をしていた。電気は復旧、灯油ストーブや暖房が稼働し、断水・排水不可でトイレは仮設かテント内にポータブルトイレを設置して袋をかけて使用ごとに凝固剤を入れてゴミ箱へ破棄していた。手洗いやうがいの排水も同様に段ボールに袋をかけて処理していた。有志団体による炊き出しと、仮設シャワー1基の設置、各部屋は10人前後で、ほとんどの避難者が段ボールベッドかテントで生活しており、換気は1日4回行われ、トイレには次亜塩素酸消毒液が、避難所内のいたるところにアルコール消毒液が設置されていた。</p> <p>超高齢地域で、避難者の多くが持病をもっており、発災前から放置していた高血圧症の悪化や、家族が被災し死亡や、病院へ搬送されて1人で避難所生活をされている方も多くいた。市内の医療機関は救急患者対応でひっ迫しており、開業医は被災し休診していた。PWJの巡回診察があり、診察や災害処方箋の依頼はできていた。(TTT)『避難生活の二次的合併症を防ぎ、健康状態を維持できるように支援する』ことを目標に活動した。避難者の健康状態の確認は、午前と午後巡回をし、その後に支援ナースでカンファレンスをひらき、情報を整理した。避難所内のマップと名簿を作成し、巡回時には会話の中に避難者の名前を入れることで関係性の構築をはかった。症状に応じて市販薬を配布し、持参薬の不足や持病の悪化など災害関連死の兆候があれば、リーダーナースを通じてPWJやDPATへの診察や処方依頼、診察の介助、保健師会や薬剤師会と情報共有、状態の確認を繰り返した。避難者の感染意識は高く、手洗いやマスク着用の意識はされているが、外は寒く朝には手洗いタンクの水は凍り、消毒液には雪が積もっている日もあった。避難者は自宅の片付けや避難所生活の疲労で感染予防をしたくてもできない状況にあり、感染への不安から避難者がストレスを感じている場面もみられた。発熱者のCOVID19検査の実施、陽性者や同室者の健康状態の確認と精神的サポート、ゾーニングや消毒液交換など環境整備、リーダーナースを通じてDMATや本部会議へ感染状況の報告を行った。活動3日目、いつも「大丈夫」と話していた女性が、涙を流して支援ナースに声をかけてきた。他の避難者の言葉に傷つき、辛く眠れないと話されていた。バディのナースと一緒に避難者の話を聞き、肩をさすって気持ちが落ち着くまでそばに付き添った。翌日DPATの診察を受け、日赤ここのケアチームへ情報共有され、避難者の状態に応じて介入が受けられる準備ができた。</p> <p>既存の資料を更新し、要配慮者など避難者情報を後任へ引き継ぎ、活動を終了した。</p>	



## 所 感

被災地への派遣要請がきた時、看護師として使命感を感じた。出発までの10日間、通常の業務をこなし携行品をそろえ、今までの研修資料を読み返して「強い使命感は避難者のニーズを見失う」という言葉に気づかされたり、「気負いしない」という言葉に励まされたりした。

避難所の学校には、小学生が作った正院新聞が壁に貼られ、感染予防の方法や炊き出しの情報が書かれていた。避難者は部屋毎に掃除当番を決めて、被災した先生が体操教室を開き、コミュニティ内で共助を感じる場面が多くあった。その一方で、他人同志が生活する非日常の環境の中で、些細な言葉や感染症の発症で避難所内の人間関係はこわれやすいとも感じた。フェーズや避難者の環境によって、求められる支援も変化しており、短い派遣期間で4名の支援ナースが協働し、潜在する問題を見つけ対応することが重要でした。

災害支援ナースの派遣を終えて、あの避難者は今どうしているだろうと考えて避難所のことを忘れたくないという気持ちと、日常に戻りたいという気持ちで自分が葛藤していることに気づいた。自分が避難者へ声をかけたように、周囲の人が自分に「眠れているか」と聞いてくれて、自分の災害派遣は周囲の協力のもとで成り立っていると強く感じた。まずはクールダウンをして、今後は学生や看護師への活動報告や、研究に取り組むなど災害看護に役立つように活動していきたい。

新潟県看護協会 e-mail : [saigai-shien@niigata-kango.com](mailto:saigai-shien@niigata-kango.com)

# 災害支援ナース活動報告書

報告者：石川 百恵

所属施設：済生会新潟病院

報告月日：令和 5年1月29日

活動日	1月 21日（日）～ 1月 24日（水）
活動場所	施設名 珠洲市立正院小学校
活動内容	<p>1月21日から1月24日まで石川県珠洲市、正院小学校の避難所で東京看護協会との計4名で活動した。1次避難所ということもあり一時400人近く避難されていたとのことだったが、私たちの活動時は昼夜約100人前後の避難者が在所、PWJの仮設診療所が設置・巡回地点になっていた。ライフラインは、電気の供給があるが、上下水道不通、給水車と屋外の仮設トイレ中心であり、支援物資の保管場の体育館は雨漏り・天井破損あり、校舎裏側にはがけ崩れが発生、海岸から200mの位置にあり、生活を送る点でも肉体的・精神的に問題点が上がっていた。また食事でも有志の炊き出しが中心で避難所運営局も疲弊し、避難者のほとんどが、単身・老々世帯であり、避難所内の自助的な活動を自ら行っていこうとする時期であった。小学校機能としては、全校生徒の約1/3の10人程度が登校し半日授業が再開されたばかりとなっていた。</p> <p>私たちが、避難所到着と同時にPWJ巡回受診があり、診察補助からの活動開始となり避難所内外の状況把握や活動計画を検討する前からの活動となった。支援ナースとしての活動は、避難者に高齢者や精神疾患を含め持病のある方が多く、症状の増悪の早期発見・内服残薬の確認・健康観察を全避難者に対して行った。前任者隊の時期までCOVIDや感染症症状の避難者がいたことから、継続して環境整備・予防の啓発活動を行い、要観察・要診療の避難者を早期にピックアップした。また、地元で普段から行われていたシルバーリハビリ体操の開催に向けて相談検討し、25日以降週2回の開催を計画することができた。避難所内の環境に対して、寒さのため換気不足しており、Co2計測できたので、具体的に声掛けを行うことができた。活動期間中、COVID1件、感冒症状者多数あり、スクリーニング検査・ゾーニングを行った。避難生活で疲弊している方も多く、精神的に不安定な方を巡回時にキャッチでき、DPATの巡回診療につなげ、PWJ・保健師等の他支援チームと情報共有することができた。</p>
所感	<p>活動中は幸いに大きな余震がなく活動できたが、避難所の安全確保が不十分な所での活動は、避難者・支援者ともに心的負担が大きく、2次避難所への声掛けをしていたが「地元から離れられない」葛藤を感じた。支援ナースは、他の支援者と協力してどのように、安全で安心できる環境を作ることができるのかを考えながらの活動であったと思う。また、活動に際して疲弊している避難所運営者に対してどのように支援を行い、援助を行えるかを悩んだ活動であった。</p> <p>今回支援ナース活動に際し、多くの協力をいただき感謝しています。</p>